



# 連携ビジョン

ともに つかちあい  
まなびあい たかめあう





## 連携ビジョン策定の目的

全国的な社会潮流として、少子高齢化の進行、人材不足、行政の財政制約等により、限られた予算、限られた人材でのまちづくりを余儀なくされている現実があります。その一方で、個人の価値観やライフスタイルの多様化、ヒト・モノの移動のボーダレス化など、従来のセオリーや自治体ごと(地域単位)での対応では収まらない事象も増えてきています。

須賀川南部地区エリアプラットフォームでは、令和3年度の『未来ビジョン』策定以降、歴史文化の街灯り景観形成実験の実施、マチソダデータベースのオープン、須賀川みらいラボの整備など、「10のみちしるべ」実現に向けたアクションを着実に積み重ねてきました。

## 1 連携の現状

### (1) 近距離 : エリプラ活動区域内、須賀川市内など

#### 想定される関係者



施設管理者・市民・商店主など

須賀川南部地区では、須賀川商工会議所、須賀川市中心市街地活性化協議会、株式会社こぶる須賀川、一般社団法人ロジカラなど、複数の団体がまちづくりに関わる取り組み※(P.11参照)を展開していますが、団体同士・施設同士の連携密度を高めることで相乗効果の発現が期待されます。

当エリアプラットフォームの活動区域である須賀川南部地区は、市庁舎、市民交流センター等の公共施設や、ホテル、飲食店等が立地する中心市街地であり、市の計画においても「ウォーカブルなまち」が目指されています。

一方で、JR須賀川駅からは直線で2kmの高台にあるため、駅周辺⇄中心市街地間の回遊率は3.3%(GPS分析より)と低い現状にあります。そこで当エリアプラットフォームでは、歩きたくなる・巡りたくなるまちの実現に向けて現状を可視化し、新たな取り組み検討に繋げる目的で、令和3年度国土交通省「ビッグデータ活用による旅客流動分析実証実験事業」の採択を受け、人流および購買データを分析しました。



▲人流データとキャッシュレスデータおよび施設情報を掛け合わせた分析の手法(ウォーカブルな中心市街地を形成するための人流分析および購買・消費分析レポートより)  
詳細は当エリプラHPに掲載(<https://tedasochima.com/areaplatform/news/>)

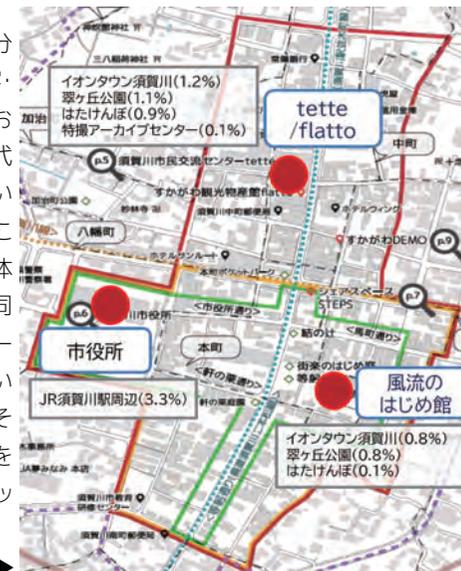
しかし、当エリアプラットフォーム単独ではリソースに限りがあり、取り組みの更なる推進には限界があるため、近距離・中距離・遠距離それぞれのフィールドで、それぞれの特色を持って活動する関係者との繋がりを強め、お互いの強み・弱みを共有して、人材・資金・ノウハウ・ナレッジ等をシェアする『連携』の必要性を感じました。

そこで当エリアプラットフォームでは、連携の第一歩として、須賀川を拠点とした、近距離・中距離・遠距離の各関係者がパートナーシップを結び、互いに高め合うための具体的方策を示した『連携ビジョン』を策定しました。

須賀川市内には、俳句文化を伝える「風流のはじめ館」や国内唯一の国指定名勝「須賀川牡丹園」、円谷英二監督の出身地として特撮技術を後世に伝える「須賀川特撮アーカイブセンター」など、貴重な歴史・文化施設が多数存在します。

しかし、市内で捕捉された市民および来街者のGPSデータを分析したところ、目的の施設に直行直帰する人が大半で、他施設への回遊や近隣店舗の“ついで利用”は少なく、人流や賑わいがスポット的で、かつ季節やイベントによって左右されるため、連続性・持続性が乏しいことが明らかになりました。

また、市内の施設・店舗を業種ごとに分類し、立地件数を可視化したところ、理容・美容室、スナック・バーが上位を占めており、業種に偏りがあること、日常的に多世代が利用できるカフェなどの業種が少ないことも分かりました。これらの現状から、これまで中心市街地を中心に、複数の団体が個別に進めていた取り組みを、団体同士・施設同士の連携密度を高めて、リソースを分かち合い、補い合って、人流・賑わいの相乗効果を最大限発揮するとともに、それぞれがこれまで蓄積したノウハウ等を学び合って、地域全体の底上げを図るネットワークの構築が必要だと考えます。



市内主要施設と中心市街地の回遊率▶(ウォーカブルな中心市街地を形成するための人流分析および購買・消費分析レポートより)

## (2) 中距離 : 福島県内、東北地方など

### 想定される関係者



まちづくり会社・エリプラ・  
中高大学生など

須賀川市は「こおりやま広域連携中枢都市圏」に参画していますが、都市再生推進法人同士など、プレイヤーレベルの連携を強化することにより、お互いの取り組みの大きな推進力になることが期待されます。

須賀川市は、仙台市に次ぐ東北地方第2の中核市郡山市に隣接し、市民の多くが通勤・通学で日中は郡山市に出るなど、郡山都市圏・経済圏の一部となっており、市として、郡山市を中心とした近隣17市町村で構成される「こおりやま広域連携中枢都市圏」に参画しています。

しかし、行政間の連携は推進されているものの、都市再生推進法人やエリアプラットフォームなど、活動の実施主体であるプレイヤー同士は接点が無く、お互いが抱える課題やそれぞれが持つリソースを知らないまま、個別に活動をしている現状があります。

当エリアプラットフォームの代表企業である(株)テダソチマは、2019年に福島県内初の都市再生推進法人に指定され、その後、郡山市内に県内2例目(2023年(一社)ブルーバード)、県内3例目(2024年(株)Discover)が誕生するなど、福島県内をはじめとして、東北地方全体で、都市再生推進法人やエリアプラットフォームなどのまちづくり実施主体が増加し、それぞれの団体が、地域の特色を活かした個性的な取り組みを推進しています。

今後は、都市再生推進法人同士、エリアプラットフォーム同士など、プレイヤー間の連携を強化することで、単独では限りのあるノウハウ・ナレッジを分かち合い、切磋琢磨し高め合う、協奏(競走)関係の構築が必要だと考えます。また、連携強化の相乗効果により、お互いの取り組みが更に加速することが期待されます。



▲東北地方を拠点とする都市再生推進法人(2024年10月末時点)

## (3) 遠距離 : 首都圏、西日本、海外など

### 想定される関係者



まちづくり会社・エリプラ・  
中高大学生など

震災復興の経験を生かし、遠距離のまちづくり団体等との連携を拡げて、災害発生時に助け合う共助の関係を構築するとともに、須賀川のシティプロモーションを図ることで、関係人口の増加や投資の呼び込みなどに繋がることを期待されます。

須賀川は、2011年(平成23年)3月11日の東日本大震災で甚大な被害を受け、国をはじめとした様々な方の協力を得て復興を成し遂げた経験があります。約10年間に渡る復興事業が完了したいま、この経験を分かち合い、他地域に還元する使命があると感じています。

また、人口減少、少子高齢化、若者世代の流出など、須賀川が抱える課題は、多くの地方都市が抱える課題と共通しており、一地域では限りあるリソース・ナレッジを分かち合い・学び合う『共助の関係』が、これからの地方都市におけるまちづくりの鍵になると考えます。

当エリアプラットフォームでは、文化・魅力を次世代に繋ぎ、持続可能な未来を紡ぐ『つなぐ・つむぐ』を基本理念にアクションを積み重ねてきました。今後は、その活動の中で出会った、お試し居住から須賀川へ移住をしてくれた人、各種講演会等で知り合った方々、デジタル人材育成支援事業で子どもたちに世界の扉を開いてくれた企業等、これまで須賀川に興味を持ち、関わってくれた人々との関係をより強化し、同時に更なるプロモーションを図ることで連携の輪を拡げて、関係人口の増加や新たな投資の呼び込みを行います。



▲DX人材育成事業の一つとして、世界のAI研究者とも親交があり、全国でDXを活用した地域課題の解決を支援している企業がアプリ開発講座を実施



▲国土交通省主催で開催された、全国のまちづくり団体が集う「都市再生推進法人等会議」で登壇する(株)テダソチマ大木代表

地域資源を最大限に活用し、須賀川が『選ばれる地方』になるためには、須賀川南部地区エリアプラットフォーム単独では限りのあるノウハウやナレッジ、リソースを他団体と分かち合い、人材交流によって高め合う繋がりの強化により、須賀川を拠点とした『連携の輪』を構築することが必要だと考えます。

## 2 目指す将来像

私たち須賀川南部地区エリアプラットフォームおよび須賀川を拠点に連携をする団体は、一地域では解決しきれない課題などを、他地域が持つリソース・ナレッジとシェアすることでより良いまちを実現する「連携の輪」を構築するために、それぞれのレイヤーでそれぞれの特色を生かしながら、密度を高め、繋がりを強化し、輪を広げる「連携」の中心となることを目指します。

とも(2) わかちあい まなびあい たかめあう

強み・弱みをわかちあい ノウハウ・ナレッジをまなびあって お互いをたかめあう 共振の波を広げます



< 近距離 >  
連携の密度を高める

市内のまちづくり団体や各施設等との連携密度を高め、それぞれのリソースを分かち合うとともに、互いに学び合って地域全体の底上げを図ることで、人流や賑わいの相乗効果を最大限に発揮し、須賀川のまちに新たなチャンスを生み出します。

< 中距離 >  
連携を強化する

福島大学をはじめとした学生等や東北地方を拠点に活動するまちづくり団体との連携を強化し、次世代のまちの担い手を育成するとともに、共同で情報発信やイベント実施を行うことにより、エリア全体で切磋琢磨し高め合う関係を構築します。

< 遠距離 >  
連携の輪を広げる

首都圏等に拠点を置く企業・住民へのプロモーションを活性化し、連携の輪を広げることで、須賀川に新たな投資・人を呼び込みます。また、西日本など遠方の団体・自治体等と連携し、災害が発生した際にお互いが疎開先となる「共助の輪」を広げます。

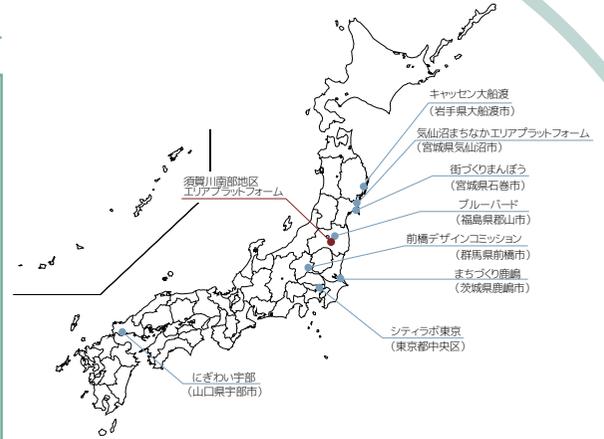


## 先進的取り組みを実践している団体との意見交換・現地視察の実施

『目指す将来像』の実現および、P.17『10のみちしるべ』実現に向けた取り組みの更なる加速・促進に資するパートナーシップ構築を目指し、近距離・中距離・遠距離の各フィールドで、先進的取り組みを実践されている団体と意見交換および現地視察を実施しました。当エリアプラットフォームからは、(株)テダソチマをはじめとした有志メンバーが参加しました。

### < 意見交換・現地視察を実施した団体 >

団体名(都道府県・市町村)	視察の視点
○(一社)ブルーバード(福島県郡山市)	経済圏を同じくする近距離での協働模索
○シティラボ東京(東京都中央区)	首都圏に拠点を置く企業・住民とのマッチング
○気仙沼まちなかエリアプラットフォーム(宮城県気仙沼市)	民間発意を具現化する社会実験
○(株)キャッセン大船渡(岩手県大船渡市)	震災復興からの防災・賑わいまちづくり
○(株)街づくりまんぼう(宮城県石巻市)	キーコンテンツを最大限生かしたまちづくり
○(一社)前橋デザインコミッション(群馬県前橋市)	民間寄附やファンドを活用した都市デザイン
○まちづくり鹿嶋(株)(茨城県鹿嶋市)	地域資源を活用した地域密着型まちづくり
○(株)にぎわい宇部(山口県宇部市)	大学生が継続的に関わり続けるまちづくり



▲ 視察・意見交換を行ったまちづくり団体の位置図

### 意見交換



#### (一社)ブルーバード (福島県郡山市)

郡山駅からほど近い築45年の空きビルをリノベーションした、地域の人・食・仕事・コミュニティが混じり合う「まちづくり拠点」Blue Bird apartment.のマネジメント会社  
Blue Bird apartment. HP ▶



日頃の活動の中で感じている課題や問題意識等について意見交換を行いました。

- 地方は経済規模が小さく、稼ぎにくい現状がある。首都圏と地方の経済合理性の違いが逆に連携に繋がる視点になるのではないかな。
- こおりやま公民協奏エリアプラットフォームの事務局を務めているが、対象範囲が広いが故に構成員の属性・狙い・目的が様々で、一つの議論を進めるのが難しいと感じている。いかにそれぞれの立場でまちづくりを自分事にしてもらうかが課題。
- 郡山には飲食店や人は多いが、須賀川のウルトラマンのようなコンテンツは無いので、集客するとするとイベントが中心になり、効果が一過性になりがち。
- 清水台での活動は7年目になるが、新規出店の店舗が増えてきて、活動を始めた頃の目標はある程度達成できた気がしているので、来春以降は新たなフェーズの事業を考えている。

#### < 当エリアプラットフォームとの連携の可能性 >

- 郡山圏の情報発信やイベントの共同企画・実施
- 中高生・大学生をはじめとした若者世代の人材交流

### 意見交換

#### シティラボ東京 (東京都中央区)

「持続可能なまちづくり」をキーワードに、様々なリソースを持つ企業・団体が集う、多様なコラボレーション、サステナブルビジネス創出に向けた参加型プラットフォーム  
シティラボ東京HP ▶



首都圏の企業・住民にとっての東北の可能性や、大都市と地方都市との連携方策について意見交換を行いました。

- シティラボ東京のレンタルスペースは、地方移住関連のイベントの利用や、地方発のスタートアップ企業と首都圏の企業とのマッチングなど、地域間連携の生まれる場になっている。
- シティラボ東京設立から7年目で、長野県小海町と初のパブリックパートナー協定を締結した。協定締結により地域間連携の受け皿は出来たが、具体的なアクションはまだ模索中。
- 今後は、企業だけでなく、学生(若者)との繋がりを強化していきたい。

#### < 当エリアプラットフォームとの連携の可能性 >

- 所有にこだわらないシェアリングを核にした施設を須賀川に整備し、そこを利用したい企業・人をシティラボ東京でマッチング
- 須賀川南部地区エリアプラットフォーム主催のイベントをシティラボ東京にて開催
- シティラボ東京で繋がった学生と、須賀川市の学生の交流機会の創出や、学生同士で企画したイベントの開催

## 現地視察



### 気仙沼まちなかエリアプラットフォーム (宮城県気仙沼市)

将来のまちづくりを担う20~40代の若い世代を中心に、市庁舎移転後のまちづくりのために組成したエリアプラットフォーム



気仙沼まちなかエリアプラットフォームHP▶

エリアプラットフォームの事務局を務める気仙沼市建設部都市計画課から、官民連携まちづくりについて説明を受けました。

令和9年に市役所が移転することとなり、移転後のまちづくりを官民連携で行うことを目的に、令和3年6月「気仙沼まちなかエリアプラットフォーム」を設立した。

「気仙沼まちなかエリアプラットフォーム」には、復興まちづくりに参画できなかった若手経営者や地域内有志の方約30名に参画いただいている。

「気仙沼まちなかエリアプラットフォーム」に市は事務局として参画しているが、運営は民間企業に業務委託している。

ビジョンに基づく社会実験を実施している。発意者が主体的に実行し、実験終了後に事業を継続する場合は発意者の費用負担としている。



▲社会実験の説明を受ける様子



▲建物が防潮堤となる交流プラザ

#### <当エリアプラットフォームと共有しあえる項目>

- 震災復興のナレッジ
- 若者の「やりたい」を支援する仕組みづくり
- 民間の構想が具現化されるまでの合意形成とプロセス

## 現地視察

### (株)キャッセン大船渡 (岩手県大船渡市)

2015年、東日本大震災の津波で浸水した区域をエリアマネジメント方式で運営するために設立されたまちづくり会社



(株)キャッセン大船渡HP▶

大船渡市防災観光交流センター「おおふなぽーと」および商業施設「キャッセン大船渡」を見学し、震災を追体験するゲームプログラム「あの日」を体験して、エリアマネジメントの手法や分担金の仕組みについて説明を受けました。

常勤スタッフ2名という少ない人数で運営することで、地域住民の方に主体的に動いていただいている。

「大船渡まちもり(まちを守る、まちを盛り上げる)大学」という学びの場を設立し、地域住民や学生を対象として、次世代の担い手となる人材を育成する講座等を開催している。

震災以前にあって今は無くなった機能の中でも、地域住民から要望があったものを誘致する視点で選定した。

エリアネ分担金は、事業の利益率や今後の見通しなどを勘案して事業者別に調整している。



▲キャッセン大船渡の視察



▲「あの日」を体験している様子

#### <当エリアプラットフォームと共有しあえる項目>

- 震災復興のナレッジ
- 次世代の人材育成
- エリマネを継続するための資金調達の仕組みづくり

## 現地視察

### (株)街づくりまんぼう (宮城県石巻市)

2001年、石ノ森萬画館を中核施設とする中心市街地活性化の第三セクターとして設立されたまちづくり会社



(株)街づくりまんぼうHP▶

旧北上川沿いの堤防空間およびマンガをキーコンテンツとしたまちなかを見学し、都市再生推進法人のまちづくり等について説明を受けました。

ポスト復興に向け、中心市街地のまちづくりビジョンと一緒に策定してきた民間事業者や団体、石巻市をメンバーに、令和7年1月に「石巻まちなかエリアプラットフォーム」を設立した。

エリプラの民間事業者や団体は、東日本大震災の復興の過程で組成された団体も多いが、これから10年先を見通したときに、今のメンバーのより一層の連携と、まちに関わってくれるプレイヤーの発掘が重要なミッションと考えている。

そのために、課題解決に向けた事業は勿論だが、一人一人がやりたいこと、楽しいと思えること(「関わりしろ」)をベースに事業を検討していく必要がある。



▲賑わう「いしのまき元気いちば」



▲マンガの創作・交流活動拠点

#### <当エリアプラットフォームと共有しあえる項目>

- 震災復興のナレッジ
- 地域資源を収益化する仕掛けづくり
- 民間主導のエリプラ組成と活動ノウハウ

## 現地視察



### (一社)前橋デザインコミッション

(群馬県前橋市)

官民連携まちづくり指針「前橋アーバンデザイン」の推進主体として設立されたまちづくり会社



(一社)前橋デザインコミッションHP▶

主要事業である「馬場川通りアーバンデザインプロジェクト」を見学し、民間主導によるまちづくりについて説明を受けました。

前橋デザインコミッションは民間会費のみによる一般社団法人で、常勤は企画局長と事務の2名で運営している。

前橋デザインコミッションはプレイヤーではなく、プレイヤーの支援・発掘・育成を行う団体である。

都市利便増進協定に基づいて、前橋デザインコミッションと市民で美観管理や賑わい創出を行い、植栽管理や公衆トイレの清掃は地域のエリアマネジメント団体が担っている。

資金調達手段はあり、まずは何をしたいかを考える必要がある。事業費を得ることを先に考えるのではなく、この事業を行いたいから補助制度に応募するといった考え方が重要である。



▲馬場川通りのウッドデッキ・ベンチ ▲時間貸できる紺屋町広場

#### <当エリアプラットフォームと共有しあえる項目>

- プレイヤーの発掘・次世代の人材育成
- 民間寄付やファンドを活用した資金調達手法
- 各種支援制度の活用ノウハウ

## 現地視察

### まちづくり鹿嶋(株)

(茨城県鹿嶋市)

2018年4月、『鹿嶋市中心市街地活性化基本計画』の実現を目指して設立されたまちづくり会社



まちづくり鹿嶋(株)HP▶

鹿嶋観光の中心コンテンツである鹿島神宮および今後整備予定の「鬼塚」を見学し、地域資源を生かした地域密着型のまちづくりについて説明を受けました。

まちづくり鹿嶋は、中心市街地活性化基本計画達成のために設立されたまちづくり会社であり、「みんな違ってそれがいい」をキーワードに活動している。

鹿島神宮の朔日参りに向けて、月末日曜日朝7時から地域住民と参道の清掃活動をしており、多い月は約80人が集まる。

まちづくり鹿嶋(株)主催、鹿島神宮共催で様々なイベントを開催しており、事業実施に係る費用は地元企業などをまわり協賛金を集めている。

今後整備予定の「かみテラス」売店に須賀川の物産を置く、イベント等での場所や人の交流などが考えられる。



▲意見交換の様子



▲神宮内で開催した学生の絵画展

#### <当エリアプラットフォームと共有しあえる項目>

- 歴史・文化資源の活用
- プレイヤー同士のノウハウ・ナレッジ
- 市民や地元企業から協賛金を頂けるような協力体制構築

## 現地視察



### (株)にぎわい宇部

(山口県宇部市)

宇部市・宇部商工会議所と連携しながら公益性を持ち機動的に事業を行うために設立されたまちづくり会社



(株)にぎわい宇部HP▶

ウォークアブル化に向けた整備が進められている常盤通りおよび若者クリエイティブコンテナ(YCCU)を見学し、公民学連携のまちづくりについて説明を受けました。

ウォークアブルシティの推進事業として「オープンストリート宇部」を実施している。令和5年度から歩行者利便増進道路制度を活用して、9店舗がテラス営業の許可を受けている。

宇部市の歴史・文化を理解し、まちづくりの成功事例に触れることで、まちづくりを主体的に担う人材を育成する「宇部まちづくりリーダー塾」を開催している。

宇部市・にぎわい宇部・山口大学は公民学連携でまちづくりを推進しており、「若者の目線」から「まちなか再生」を考える場として開設したYCCUでは、山口大学の学生が研究・発信・交流の場として継続的に関わり続ける仕組みが構築されている。



▲意見交換の様子



▲若者クリエイティブコンテナYCCU

#### <当エリアプラットフォームと共有しあえる項目>

- プレイヤー同士のノウハウ・ナレッジ
- 各種支援制度の活用ノウハウ
- 学生が積極的、継続的にまちづくりに関わる仕組みづくり

# 3 まち育て連携フォーラム 2025 in 須賀川



当エリアプラットフォーム単独ではできない課題解決や地方都市の魅力向上を目指し、当エリアプラットフォームと全国のまちづくり団体との連携を推進する第一歩として、『まち育て連携フォーラム 2025 in 須賀川』を開催しました。

本フォーラムでは、全国でまちづくりに取り組む先進団体の皆様を須賀川にお招きし、『わかちあい、まなびあい、たかめあい』の連携について、その可能性や方策について話し合いました。

## < 開催概要 >

日時：2025年1月31日(金) 13:30～17:30

形式：現地開催（後日アーカイブ配信）

会場：須賀川市民交流センターtette たいまつホール

参加者：全国の自治体職員、まちづくり関係者、須賀川市民、学生など  
現地参加者：144名、アーカイブ配信申込者：44名

## < 登壇者 >

### 基調講演

弘前大学 特任教授 北原啓司氏

### トークセッション

モデレーター：弘前大学 特任教授 北原啓司氏

パネリスト：

○須賀川南部地区エリアプラットフォーム 会長 大木和彦氏

○須賀川南部地区エリアプラットフォーム 事務局 関根詩織氏

○(一社)ブルーバード 代表理事 佐藤哲也氏

○(株)キャッセン大船渡 取締役/タウンマネージャー 臂徹氏

○(株)街づくりまんぼう まちづくり事業部 部長 荻谷智大氏

○(一社)前橋デザインコミッション 事務局長/企画局長 日下田伸氏

○まちづくり鹿嶋(株) タウンマネージャー/取締役 済藤哲仁氏

○(株)にぎわい宇部 取締役/山口大学 教授 宋俊煥氏

### クロージングトーク

○弘前大学 特任教授 北原啓司氏

○国土交通省 都市局 まちづくり推進課 官民連携推進室長/  
国際競争力強化推進官 山田大輔氏

○須賀川南部地区エリアプラットフォーム 会長 大木和彦氏

○須賀川南部地区エリアプラットフォーム 事務局/永山美志氏

## (1) 基調講演 『地方から”発振”するまち育ての連携』

北原啓司氏(弘前大学特任教授)をお招きし、『地方から”発振”するまち育ての連携』と題して、これからの地方都市の在り方や、連携の必要性について講演いただきました。

都市再生推進法人は、究極の「関係人口」であり、自覚やプライドを持って関わっていく“賢いイルカたち”です。イルカたちは相互に新たな関係を紡いでいきます。

一事例は決して大きな影響力を持つものではなくても、繋がっていくことにより、エリア全体の魅力が向上していきます。

大きなまちづくりを仕掛けるマネジメントではなく、共通の戦略を持ちながら、個々の「場所」で、身の丈で、かつ、ワクワクするような夢を描き続けていくことが『エリアマネジメント』であり、『まち育て』だと考えています。

黒石の中心市街地の土地所有者(オオヤケ)は、土地売買の重要な主体となり、顔の見える範囲内で売買を行ってきました。その思想は現在でも続いており、まちを自分たちの「場所」にしたいと考える若者たちでNPOを結成しました。市民が「まち」の関係人口に成長していきます。

プラットフォームは、周辺より高くなった平らな場所を意味しています。我々はどの列車に乗って行くのか、みんな同じ列車に乗る必要はないのではないのでしょうか。ちょっと高い場所から周りを探ってみたり、たまには違う駅にも降りてみたり。『エリアプラットフォーム』は自由に乗り降りしながら、唯一無二のローカル、自分たちを目指すための連携です。



▲基調講演の様子

## (2) トークセッション

北原啓司氏(弘前大学特任教授)をモデレーター、全国各地でまちづくりに取り組む7団体をパネリストとし、まちづくりにおける『連携』の在り方について議論しました。

【北原特任教授】 連携の必要性や可能性、このような時に連携できたらもっと良くなると感じた経験はありますか。

【大木氏】 自分が早く挑戦して、成功談や失敗談を様々な場所に広めていくことが、この国にとって良いことだと考えています。「上手くいかないけど、今後どうしようか」をみんなで話し合う機会を作ることが重要だと思います。

【臂氏】 失敗の経験を共有することはとても重要で、鎧を脱いだ連携、ぶっちゃけた連携が、良いまちづくりに繋がってくると思います。

【荻谷氏】 他団体の取組が石巻のまちづくりにそのまま活用できることはあまり無いと思いますが、発想やその姿はとても刺激になります。

【日下田氏】 『地域間連携』はあまり踏み込まないで、前橋での手法を視察やフォーラム等で伝えるなど、自分の手の内を伝えることぐらいしかできないかなと思っています。結局、コミュニケーションが連携だと感じています。

【宋氏】 まちづくりはずっと続くもの、やり続けるものだと思います。その上で、視察はやはり重要なことで、行って見ることが新たな経験になりますし、悩んでいることを共有することでお互いが元気になると感じています。



▲トークセッションの様子

【**済藤氏**】『連携』の前に自立することが重要だと考えています。自分たちが楽しく活動することが大切であって、その基盤ができてないと、「個」が無いと、連携する意味が無いと思います。信頼関係を築き、「縁」を強くすることが重要です。

【**佐藤氏**】「気が付いたら連携していた」様な環境が重要だと思います。挑戦して、失敗を繰り返して、「次こうしてみよう」が蓄積されて、自分たちのノウハウや考え方、言葉が生まれて、地域になっていく『連携』が良いと感じました。

【**臂氏**】まちづくりを進めるにあたって、「この人ならどう考えるかな」を想像することが重要だと考えています。また、まちづくり仲間からの「最近どう？」様な声かけも連携の一つだと思います。

【**苅谷氏**】組合や同盟という形も『連携』の延長としてあると考えています。しかし、石巻が須賀川のために何かをするというのは少し違うと思っていて、あくまでも会社や地域の自立に向けて、明確な目的を持つことが連携に繋がると考えています。

【**関根氏**】他団体とコミュニケーションを取りながら、刺激や学び、気づきをいただいて、その中で模索しながら取組を実施していくことが『エリアプラットフォーム』なのかなと思いました。

【**大木氏**】まちの価値を下げない、自分たちで自分たちのまちをどうするか『エリアプラットフォーム』だと思います。これからやってみたい、聞いてみたいも全て『連携』だと感じました。

【**北原特任教授**】事業が成功した人はまちづくりが終わったとは思っていません。目標はどんどん変わっていくので、まちづくりは終わらない。それを共有していくことも連携の一つです。「連携できちゃったね」というノリが『連携』として重要だと感じました。『連携』することが目的ではなく、また、『連携』のスキームを考えるのではなく、「縁」を強くしていくことが重要だと思います。

### (3) クロージングトーク

本フォーラムを振り返りながら、まちづくりにおける『連携』について、国(国土交通省山田氏)・学識(弘前大学北原特任教授)・地域(須賀川南部地区エリアプラットフォーム大木会長、須賀川南部地区エリアプラットフォーム永山氏)の視点から議論しました。

【**北原特任教授**】基調講演、トークセッションから、まちづくりにおける『連携』について、何か感じたことはありますか。

【**山田氏**】異分野の方々との出会いや、同じ立場で物事を考える方々の集積が大事だと思います。また、自治体同士の連携は、弱みを補う補完的な連携になってしまうので、新しい価値を創造するときは「個」、エリア同士の連携が必要だと考えています。

【**永山氏**】まちづくりには終わりはなく、時代に合わせて変化が必要だと考えています。また、『地域間連携』だけでなく、地域住民とのコミュニケーションも積極的にを行い、『地域内連携』も強化していきたいと思いました。

【**大木氏**】須賀川南部地区エリアプラットフォームは国土交通省に育ててもらいました。今日のフォーラムを開催したことを、どう他の地域に還元できるのかが重要だと感じました。

【**山田氏**】連携することで事業やビジネスが生まれるような、地方と大都市の連携を思い描いていましたが、アウトプットは簡単なものではないと感じました。『連携』は自分たちの活動を先鋭化させるような、壁打ちの意味もあると思いました。

【**北原特任教授**】まち育ては子育てと一緒に終わりはありません。皆さんで、エンドレスで頑張ってください！



▲トークセッションのグラフィックレコーディング①



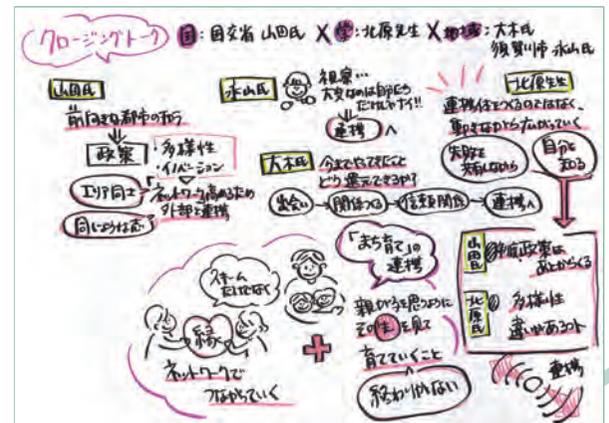
▲トークセッションのグラフィックレコーディング②



▲トークセッションの様子



▲クロージングトークの様子



▲クロージングトークのグラフィックレコーディング

## 4 連携の考え方（ロードマップ）



『連携』すること自体が目的ではなく、自分たちのまちや活動をより良くするために必要な『連携』を以下の考え方（ロードマップ）で進めていきます。

### 各個人・各団体が自立

自分たちの組織運営や活動を確立させることにより『個』を作り、他団体と連携する前の基盤を固める。



### 他団体とコミュニケーションを図る

視察や意見交換等を通して、全国のまちづくり団体と積極的にコミュニケーションを図り、刺激や学び、気づきを得る。



### 他団体と連携する

お互いのまちをより良くするため、自分たちの活動を先鋭化するために、できることから連携していく。



## 5 連携方策

### （1）近距離連携：連携の密度を高める

市内のまちづくり団体や各施設等との連携密度を高め、それぞれのリソースを分かち合うとともに、互いに学び合って地域全体の底上げを図ることで、人流や賑わいの相乗効果を最大限に発揮し、須賀川のまちに新たなチャンスを生み出します。

#### 人材の連携

市内の中高生を中心とした若者世代との連携密度を高め、まちづくりにおける次世代の担い手を育成するとともに、世代間交流や出店者交流など、まちなかに住んでいる人、働いている人が普段から交流できる環境を創出します。

#### 活動の連携

これまで、市内で個別に活動していた団体同士の連携密度を高め、まちなかの都市アセットを最大限活用しながら、お互いに学び合って、ノウハウ・ナレッジの底上げを図ります。

#### 情報の連携

エリプラ区域内の情報発信を強化するため、当エリアプラットフォーム活動で得た情報を公開しつつ、エリプラ区域内の施設・店舗との連携密度を高めて、賑わいの相乗効果の発揮や新たなチャンスを生み出します。

#### 連携方策

- 方策① 当エリアプラットフォームに「学生チーム」を作り、中高生主導でのまちづくりプロジェクトを実施する
- 方策② 当エリアプラットフォーム会員企業が、まちづくりに関する出前授業を実施し、学生がまちづくり活動に触れる機会を創出する
- 方策③ 地域住民を対象とした防災イベントを実施し、災害時に「共助」ができるような地域コミュニティを創出する
- 方策④ まちなかで出店している人と新たに出店を目指す人の交流機会を創り、まちなかでの出店や起業のチャレンジを増やす

#### 連携方策

- 方策① 須賀川市内で様々なイベントを実施している団体と共同でイベントを企画・実施し、同じ志を持ったまちなかの様々な団体とのコミュニティを構築する
- 方策② 須賀川みらいラボを、地域住民の活動の拠点として開放し、イベントの実施や勉強、打合せ、趣味の活動など様々な用途で使用する
- 方策③ 福祉のまちづくり推進を目指し、須賀川市内の福祉事業者と定期的に意見交換を実施し、子ども食堂の開設や健康啓発イベントの実施など、福祉に関する事業を企画・実施する

#### 連携方策

- 方策① エリプラ区域内の魅力発信のため、エリプラ区域内の施設の方にインタビューを実施し、当エリアプラットフォームHPに施設情報やインタビュー内容を掲載する
- 方策② 当エリアプラットフォームHPや様々なSNSを活用し、地域住民の方が須賀川でのまちづくりについて知る機会を創出するとともに、地域住民の意見を吸い上げる
- 方策③ まちなかの人流調査を実施し、滞在者数や属性、回遊率などの調査結果を、まちなかでの出店希望者に提示し、出店場所や業種の選定に活用する

## (2) 中距離連携：連携を強化する

福島大学をはじめとした学生等や東北地方を拠点に活動するまちづくり団体との連携を強化し、次世代のまちの担い手を育成するとともに、共同で情報発信やイベント実施を行うことにより、エリア全体で切磋琢磨し、高め合う関係を構築します。

### 人材の連携

福島大学をはじめとした学校等との連携を強化し、まちづくりにおける次世代の担い手を育成するとともに、東北エリアのまちづくり団体との人材交流を実施し、あらゆる視点からまちづくりを考える機会を創出します。

#### 連携方策

- 方策① 大学と連携し、まちなかでの定期的なゼミの開催や、研究テーマとなるような、長期的なまちづくり活動の機会を提供する
- 方策② 東北エリアのまちづくり団体と定期的に人材交流を行い、地域外の視点から見た、新たな活動案や地域課題解決方法を提供しあう

### 活動の連携

東北エリアの都市再生推進法人やエリアプラットフォームなどのまちづくり団体同士の連携だけでなく、地域住民同士の連携強化を図り、東北エリア全体の関係人口・交流人口の拡大を目指します。

#### 連携方策

- 方策① 東北エリアのまちづくり団体と合同でイベントを企画・実施し、お互いの地域の関係人口拡大を目指す
- 方策② 年代や障がいの有無に関わらない、あらゆる関係人口の拡大を目指し、東北エリアのeスポーツチームを対象としたeスポーツ大会を須賀川のまちなかで実施する

### 情報の連携

東北エリアの都市再生推進法人やエリアプラットフォームなどのまちづくり団体同士の定期的な情報共有の場を創り、東北エリアが丸となって更なる発展を目指し、切磋琢磨しあえるコミュニティを構築します。

#### 連携方策

- 方策① 東北エリアのまちづくり団体と定期的に意見交換を実施し、お互いの活動状況やノウハウなど情報を共有しあう
- 方策② 東北エリアの都市再生推進法人やエリアプラットフォームなどを対象としたフォーラムを継続的に開催し、まちづくりについて気軽に相談し、情報共有しあえるコミュニティを構築する

## (3) 遠距離連携：連携の輪を広げる

首都圏等に拠点を置く企業・住民へのプロモーションを活性化し、連携の輪を広げることで、須賀川に新たな投資・人を呼び込みます。また、西日本など遠方の団体・自治体等と連携し、災害が発生した際にお互いが疎開先となる「共助の輪」を広げます。

### 人材の連携

須賀川の学生と全国・世界の学生が交流できる機会を創出することで、学生の未来の可能性を広げるとともに、東北エリア以外のまちづくり団体との人材交流を実施し、あらゆる視点からまちづくりを考える機会を創出します。

#### 連携方策

- 方策① 令和5年度に実施した「須賀川ワガママLab」を継続的に実施し、須賀川の学生と全国・世界の学生が交流できる機会を創出する
- 方策② 学生の交換留学を行い、他地域の学生との交流機会を創出する
- 方策③ 全国のまちづくり団体と定期的に人材交流を行い、地域外の視点から見た、新たな活動案や地域課題解決方法を提供しあう

### 活動の連携

西日本など遠方の団体・自治体等との連携を強化し、どちらかで災害が発生した際の疎開先となる共助の輪を広げるとともに、お互いの地域を魅力を知ってもらえるような取組を実施することで、関係人口の拡大を目指します。

#### 連携方策

- 方策① 南海トラフ地震や首都直下地震など今後想定される災害に備えて、須賀川のまちなかで疎開できる場所や設備を整えるとともに、全国のまちづくり団体と防災について意見交換を実施する
- 方策② 全国のまちづくり団体と連携し、お互いの地域の特産品などを販売しあう

### 情報の連携

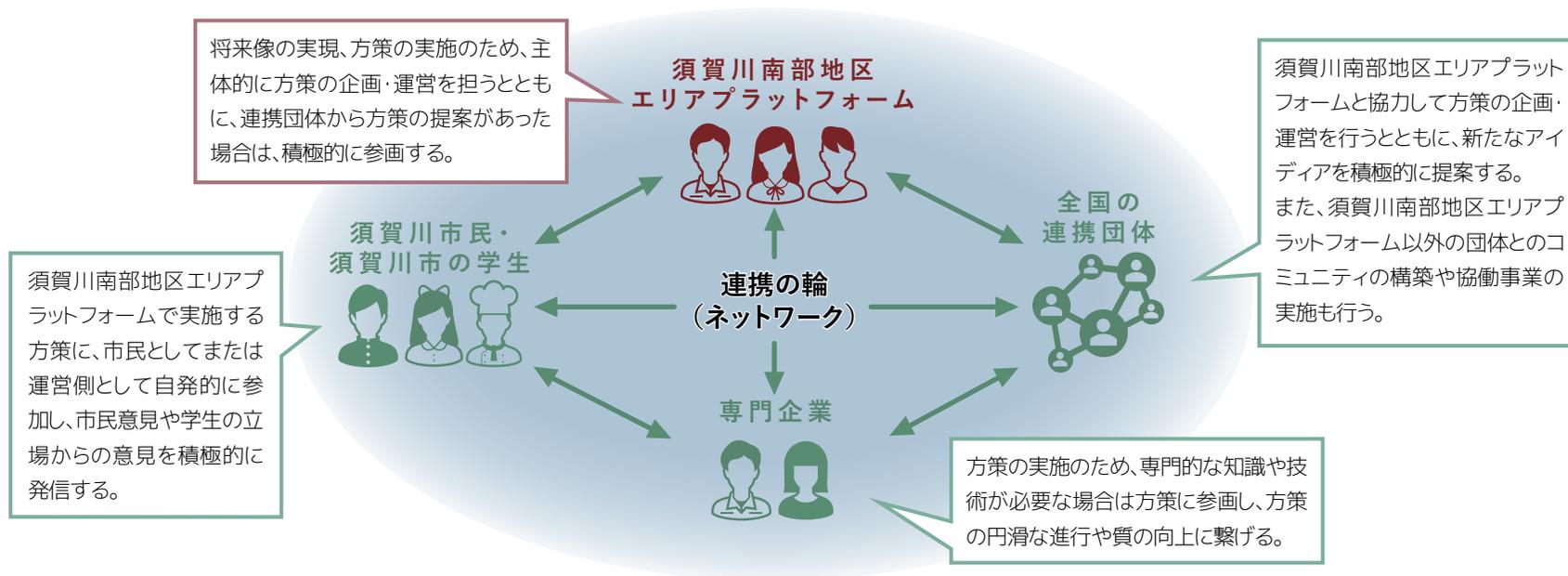
首都圏などの企業や住民へのプロモーションを強化し、職・住のサテライトとなることで、須賀川に人や投資を呼び込み、新たなチャンスを生み出します。また、全国のまちづくり団体と定期的な情報共有の機会を創出し、コミュニティを構築します。

#### 連携方策

- 方策① 全国のまちづくり団体とお互いの地域についての情報発信を行い、移住や二地域居住の促進を目指す
- 方策② 全国の都市再生推進法人やエリアプラットフォームなどを対象としたフォーラムを継続的に開催し、まちづくりについて気軽に相談し、情報共有しあえるコミュニティを構築する

## 6 連携における役割分担

須賀川を拠点に様々なレイヤーで様々な団体が「共に分かち合い 学び合い 高め合う」小さな取り組みを着実に積み重ね、お互いに切磋琢磨しながら「連携の輪」を広げていきます。



### エリプラホームページの構築

これまで当エリアプラットフォームには専用ホームページがなく、まちづくりに関する情報や、これまでの活動を発信する場がありませんでした。

また、全国他のエリアプラットフォームについて検索をしても、専用ホームページ等を開設している団体は少なく、他地域の団体が、どのような課題を抱え、どのような活動をしているのかが見えにくいと感じたことから、「情報の連携」の一手段として、専用ホームページを開設しました。

本ホームページの構築にあたっては、福島県の地方創生イベントをきっかけに須賀川に集まったIT技術者が、須賀川を拠点に共同で設立したIT会社(株)SUKAGAWAチャレンジに制作を依頼をし、当エリアプラットフォーム会議にもゲスト参加していただきながら作り上げました。

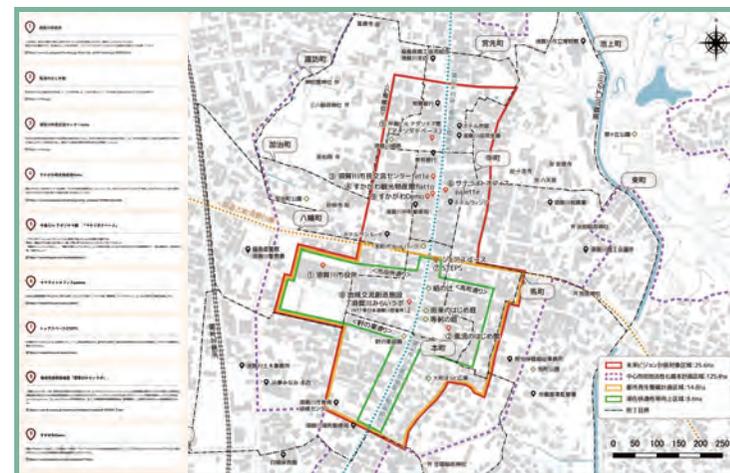
今後は、当エリアプラットフォーム会員企業と協力しながら、当エリアプラットフォームの情報や活動区域情報について発信していきます。



▲ホームページQRコード



▲参画企業のHP等にリンクする紹介ページ



▲活動区域と施設情報ページ